

園との連絡ノートをひもとく ―障害を持つ娘Aの育ち その3―

しょうごもり
庄 籠 道 子

(保育研究グループはるにれ)

はじめに

現在2才になる娘Aは、生後8ヶ月の時に脳腫瘍摘出手術を受け、歩行や言語などの発達が遅れた。2才から4才まで週2日肢体不自由児通園施設に母子通園したあと、近所の幼稚園の4才児クラスに入園した。

出席ノートの「おたより」のページに私が手紙を書いて持たせると、担任が返事を書いて持たせて下さった。毎日のように文章のやりとりが行われた。欄がいっぱいになると「おたより」欄をコピーして別の連絡ノートを作って下さった。その連絡ノートは2年間で400ページを越す量となった。

連絡ノートは、家では私が書き、たまにAが自分も書きたいと文字らしきものを書き入れた。夫は時々読むことはあっても書くことはなかった。園では、ふたりの担任が読み、日によってどちらかが書いて下さっていた。

O 幼稚園

Aが2年間通ったのは、九州福岡県にあるO短大の付属幼稚園で、行事のための練習はしない、子どもの全面的な発達をめざして自発的な遊びを大切にする幼稚園だった。5才児クラスが2、4才児クラスが2、3才児クラスが1。園長は短大の助教授が兼ねていた。

O幼稚園は、その春、クラス数が1つ減ることになり、Aのクラスだけ2人担任にしてAを迎えて下さった。

「連絡」ノート

Aは、まだ排泄を失敗することが多かった。園の着替えを借りて着て帰ってきた。だから、庄籠「園のぱんつ、持たせます。ありがとうございました」とか先生「きょうは、トイレで成功しました」などの連絡がたくさん出てくる。庄籠「きょうは、〇時に迎えに行きます」などの連絡も出てくる。バス通園のため、朝、直接担任と話すことができなかったのも、「連絡」ノートとして、大切な役目を果たしていたことがわかる。

「記録」ノート

入園した頃、Aは、まだひとりでは歩けず、発語はほとんどなく、「ん!」と指差して意思を伝えていた。

Aは、2年間で爆発的に言葉がふえ、ひとりで2、3歩歩くこともできるようになった。連絡ノートには、

庄籠「『とおい』と初めて言いました」(④

4.23)[4才児クラス4

月23日以下略]

先生「『きょう、ひと

りでたったよ、Aちゃん』とBちゃんが

言ったので、みんな

びっくりしました」

(④ 5.20) 先生

「『きょうね、ごは

んため(べ)てね、(こ)どーもげきじょう、いく』と

言

って、楽しみにしてました」(⑤ 5.20) 庄籠「散歩

に行く前、Aがひとりで4歩歩くのを見ました」(⑤ 10.13)

などお互いに報告し合っている。これらを読むと、「記

録」ノートとしても重要なものであることがわかる。



園舎の中では、車輪のついた木馬に乗って移動していた。

これは、卒園式の時、証書をもらいに行くところ。

「心の支え」ノート ノートより

庄籠 きょうは、園から帰ってから、CちゃんとDちゃんとEちゃんとFちゃんが(うちに)来てくれました。CちゃんとDちゃんを車に乗せてる時(うちの車で迎えに行った)Cちゃんが「前に乗りたい」と前の座席に行くと、「Aも」とAも前に行き、「せまい。Aちゃんうしろにいかんね」とCちゃんが半ベそをかき「いや」とA。Cちゃんが後ろに行くとAも後ろに・・・(中略)・・・うちに着いて、ド・レ・ミ・・・と踏むと音が出るマットにみんなが乗って遊んでいるとAがスイッチをつけたり消したりして、みんなが「やめて」と言うのに、ふざけてますますしていると、Cちゃんを中心に「Aはもう」「もう!すかん」「もう、あそんでやらんからね」とたたいたり、おさえつけたりして、Aが「うーん」と泣くと「なきまねして」「うそなき」とますます押さえつけられていました。・・・(中略)・・・「うそなきやん。なみだでやらんもん」と、ほっぺたをたたきはじめてたようでした。私は食卓のところで仕事をしていましたが、あまり悲しくなってしまったので、つかつかとそばまで行くと、Aは意外なことにケロリとしていました。「みんなも、みんなからそんなに言われたらいややろ。そ

んなにいいじめで」と言いました。それから、あんまり言ってないみたいでしたが・・・そうかと思うと、Aがひとりで立ったら「Aがたったよ。わー」と手をたたいて喜んでくれたり、「A、かわいい」と言ったり(Cちゃん)・・・子どもの世界って「みんな仲良く遊ぼう」なんてきれいごとではないんだなと思ったり、こんな半分ふざけてやっているのが、今はやりのいいじめになるのかなと思ったり、聞いている私の方がつらくて泣きそうになってしまったのにAはたくましいなあ、お友達だからなあ、と思ったり。Aが本当に友達とぶつかりあうってというのは、こういうことなのかなあ、違うように思うが・・・何とも複雑な気持ちです。(④ 1.9)

先生 よく我慢されたものだと思います。中に入れたタイミングや、言われたことで後に残っている様子もないことから、これで良かったのだと思いました。子ども達の様子を読んでうーんとうなってしまうしました。ただ本当にAちゃんが嫌いなら、こんなに正々堂々と残酷なことは言えないのではないかと、子どもの感じ方というのは大人の表面だけで感じるのと違って、深い所で感じとれる力をもっていると思うので、私たちが聞いて本当に悲しいなと思うことばでも、Aちゃんはその深い所を感じとっているから、意外とケロリとしていられるのではないかと思います。私たち大人が聞くと、本人以上に感激したり、本人以上に悲しくなったりするものですね。いつもケンカするというのも、しないようにこっちが言ってやるのはかんたんだけど、それでは本人が育たないと思うし、Aちゃんは、今、いろいろ学んでいる途中だし、むずかしいなあと思います。(④ 1.9)

庄籠 ご心配をおかけしました。翌朝、バスの中からEちゃんとFちゃんが声をあわせて『おばちゃん、きのうはありがとう』と言いました。その屈託のない表情を見て『ああ、これは心配いらないんだな』って思いました。

土曜日は、CちゃんとDちゃんと・・・たくさん子どもたちが来てくれて、紙芝居やペープサートをしたあと、ドタバタと元気よく子どもたちだけで遊んでいました。その様子を見て安心しました。本当に大人の方が本人以上に感激したり悲しんだりするものですね。子どもたちには子どもたちの世界があるんだなと改めて思いました。

でも、大人が聞いて、いくらなんでもあんまりだと思ふことには『私は、それはいやよ。いけないと思うよ』と意志を表明してもいいですよ。(④ 1.12)

先生 いいと思います。・・・(後略)・・・(④ 1.14)

考察

A が O 幼稚園に入園する前から、私は自宅を開放して、週2日「あそび場チーミー園」という保育の集まりをやっていた。A が入園してから、少しずつ幼稚園の友達が、園から帰ってからチーミー園に遊びに来てくれるようになった。私は、A を乗せて、電話で約束した子どもたちを自家用車で迎えに行ったりした。母子いっしょに来てくれる人もいたし、子どもを送ってきてくれるお母さんもいた。

これは、その迎えの時と、チーミー園のできごとである。私は、とてもつらい思いをし、迷い、子どもたちに意見を言った後も、これで良かったんだろうかと悩んだ。その思いをえんえんと連絡ノートに書いて先生にぶつけている。

先生は、きちんと読んで、本気で考え、自分の意見を書いて下さっている。私は、私の書いたことを正面から受け止め、本気でいっしょに考え悩んで下さることに心から元気づけられた。自分とは違う発想の意見には、目からうろこが落ちるような気もした。先生方や園に対する信頼も、連絡ノートのやりとりを通して、どんどん深まっていた。

この連絡ノートは、私の「心の支え」ノートだったと、今、改めて思う。

おわりに

園に行くと、先生と A の様子は、まるできょうだいのように心から信頼し合っていると感じられた。A は先生たちのことも友達のことも、好きで好きでたまらないようだった。A は、周りの暖かいまなざしの中、尊敬と自信を持って園生活を送った。

先生方は、ふたり担任とはいえ、保育中だというのに、ノートを読み、本気で考えて書いて・・・本当によく付き合ってくださったことだと改めて感謝の気持ちでいっぱいである。

A は、今、東京にアパートを借りて一人暮らしをしながら東京シューレ(代表 奥地圭子さん)に通っている。連絡ノートに支えられて母子ともにしあわせな2年間を過ごすことができたことが、A の今を支えている。そんな気がしている。



雪の日に園庭で。大好きな先生に支えられて お友達と遊ぶ。